

横浜市小学校社会科研究会

4学年部会

研修会記録

第 2 号

令和5年 9月 8日

横浜市小学校教育研究会

会長 濱田 哲也

横浜市小学校社会科研究会

会長 加藤 和之

同 学年部長 本間 宏志

【提案日時】

7月 5日 (水)

提案 山口 暁風 先生 (小田小)

【会 場】

横浜市立平沼小学校

司会 大橋 亜矢子 先生 (元街小)

記録 杉山 将一朗 先生 (神奈川小)

1 提案内容

単元名「ごみはどこへ～まちをきれいにするために私たちができること～」

2 提案者より

これまでの社会科の学習では、資料をじっくりと読み込み、自分の考えをもったり、それらを共有したりすることに力を入れてきた。調べ方がわからない児童には一緒に考えたり、考えに自信がもてない児童にはノートへのコメントや会話で価値付けたりするなどして、支援してきた。そこで、学習計画を立てる際に【学ぶ内容】だけでなく【学習方法】に関する計画も立て、それをもとに調査活動に取り組めるようにしていった。具体性のない計画に対しては、教師との会話の中から具体性を高め、実行に移せるように支援した。

本単元では、横浜市と企業、市民が一体となって、廃棄物の減量・資源化に取り組んでいることを学ぶ学習である。それらの廃棄物に関わる人々の努力や工夫により、資源の有効利用が進められていることや私たちの生活環境の維持と向上に役立っていることを理解し、学んだことをどのように自分の生活に生かしていけるか、ふり返られるようにした。

視点①

子どもが問いや見通しをもち、主体的に学ぶ単元づくり

子どもの問いをいかし、単元の見通しがもてるような学習計画を立てる。

単元が始まる前から、家庭でどんなごみがどのくらい出ているのかの「ごみ調べ」を行う。その結果から、感じたことや分かったこと、考えたことを共有し、単元を見通す学習問題をつくっていった。本単元では、ごみ焼却場と資源選別センターの見学が導入時に設定されているため、見学後のふり返りをする中で生まれた問いを基に、学習計画を立て、子どもたちが学習の見通しをもてるようにした。

自らの学びを自覚できるための学習内容と学習方法のふり返りを行う。

毎時間の最後に、【学習内容】と【学習方法】をふり返る。前単元の「神奈川県」の学習では、学習内容(分かったことや考えたこと)のふり返りを中心に行った。そのため、本単元から【学び方】も加えてふり返りをしていった。毎時間ふり返りを行い、教師が朱書きでコメントをすることで、自分の学びや成長を自覚し自信をもって学習にのぞむことができるようにした。また、その学びを次の単元や他の教科にも生かしていけるようにした。

視点②

個の学びを生かし、協働的に学びを深める授業づくり

個のみとりを大切に、子どもの思考に沿ってつなげていく。

本単元では、「今のままでは、現在の最終処分場があと30年しかもたない」という事実と「それでも横浜市はあと50年使おうとしている」という事実を出合わせることで生まれたずれから、本気の学習問題の成立につなげていった。話し合う中で、「もやすごみの中に、まだ減らせるものが多く含まれている」事実を扱うことで、子どもの考えや変化をみとり、つなげていけるようにした。そのために、子どもの考えを教師がみとり、子どもの発言の根拠となりうる資料を用意することで、協働的な学びを充実させていくことを目指した。

3 協議事項

視点1(記録者参加)

Qゴミ調査から入っていった単元スタートについて子どもの意欲につながったのか。

→見学をした上で、学習問題を作り始めることでごみの量に着目し、興味関心を深めながら学習を進められた。ゴミ処理場で分かったことやこれから調べたいことや知りたいことを決め、学習を進めていった。

Q見学を単元の初めに行くのか、終わりに行くのか。

→流れがわかっていた方が、より身近に実感的にできるのでないか。本実践では、最初にゴミの量に視点を絞って、工場に行っている。その視点はなかったのととても面白かった。

- 授業の中だけでない、学びの仕方。それが積み重ねること、主体的に進められるようになる。ほめ→認め→任せるという過程を積み重ねること、質の高い学びに繋がった。
 - 1人もこぼさない授業。社会科は、みんなが同じ土俵に立って学ぶことができる教科。だからこそ、学び方をクラスで高め合っていくことで、深い学びにつながって行くと感じた。
 - 子どもが調査して、進めていく難しさも感じた。直接見に行くことのできない最終処分場の取り扱いをどうするか難しいと感じた。
 - 身近な企業(スーパー)の取り組みなど調べる。身近なところから広げていけば、50年のことも考えられるかもしれない。
 - 子どもの疑問を共有していくことで、さらに疑問が出てくる。
- それが学級としての疑問になっていく。
- 子どもが資料を持ってくるのは、教師の支援もある。その積み重ね。
 - スタートダッシュに重きを置くことが重要。
 - これ調べてきて→主体的でないのでは？
 - 東京都と横浜市のごみの捨て方に視点を置いて、比較することでそこから問いが生まれていく。
- 主体的な学び。

視点2

ワークシートが活用されたか、みとりを使った意図的指名がどうなったのか、資料はどうだったのか。改めて考えるきっかけとなった。

学び方の振り返りを行ったことや子どもたちの調べてきたことをしっかりとみとったことが、学びに繋がった。

自分たちがごみを減らすためにできることを考えることは、今後の生活や単元のどんなところに繋がりがあのか考えていくとより深い学びにつながる。

4 講師の先生より

元石川小学校 校長 野間 義晴 先生

視点1について

調査活動+見学に行ったことが大きなはてなにつながったので、最初に工場見学を入れたことは子どもたちにとってよいアプローチとなった。

→「誰がどうやって処理しているのだろう？」

視点2について

第10時間目がなくても繋がるが、もう少し考えさせたい。そのために「50年使い続けるためには。」が入っている。普段から子どもを丁寧にもとっているからこそ、この時間が入っている。

→このような時間が、学習の質に繋がっていく。

みとったことを教師が頭に入れたもしくは座席指導案等にメモした上で、授業を展開していくことで、児童それぞれの考えを深められる。それが、話し合いを深めていくことができる。

ただみとるだけでなく、誰をどのように活かしていくことが大切。